

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、表現を変えたところがあります。)(六十点)

「ぼく(遠藤宏志)」、「木島陽介」、「高頭健太」は小学校六年生。文化祭で「眠れる森の美女」が演じられることになり、クラスでういている「壬生紀子」は、女子たちのたくらみで、ヒロイン役のオーロラ姫に多数決で決まってしまった。「ぼく」も「壬生」を避けていたが、昨日、不良の中学生にからまれている所を、「壬生」の勇氣ある行動で助けられていた。「ぼく」は自分でもよく分らないうちに、フィリップ王子役に立候補した。いよいよ演劇の練習がはじまった。

壬生はばかにした笑いの中で、投げやりな態度を見せず、こわい顔をして真剣に踊った。それはまるでクラスの生徒たちへ挑戦しているかのようだった。フィリップ王子役になった* 沼田先生を相手にした踊りになると、笑い声は a **イソウ** 大きくなった。

ぼくはすっかり憂鬱になった。沼田先生との踊りでもこれだけ嘲笑が起きるのだ。ぼくと壬生の踊りでは、どれだけの笑いが起きるか分からない。

しかし壬生はどれだけ笑い声が大きくなるうとも、はずかしかるそぶりも見せずに黙々と踊っていた。そのとき、ぼくはあることに気付いてはっとした。壬生は沼田先生の踊りを一度しか見ていないにもかかわらず、その振り付けをほとんど完璧にマスターしていたからだ。皆がそれに気づいていたかどうかはわからない。女子たちは相変わらず壬生の踊りをバカにしたように笑っていた。① **ぼくの中で何か** 吹っ切れた。もう皆の笑いなんかこわくないと思えた。

二人のレッスンがおわって、(A) **ぼくと壬生の踊り** になったとき、自分でも意外なほど落ち着いているのがわかった。

まずは壬生が一人で踊る。前よりもさらに上手くなっている。そして沼田先生の合図でぼくが近づく。壬生が不機嫌そうな顔でぼくの手を取り、二人で踊った。皆が大きな笑い声を立てるのがわかったが、(B) **少しも気** にならなかった。

ただ、ぼくが振り付けをちゃんと覚えていなくて、そのたびに沼田先生の指導の声が飛んだ。壬生は **b シュウシ** 怒ったような顔で、しかしぼくをリードするように踊った。

壬生がぼくに体を預けるシーンになった。直前、壬生はちらっとぼくの顔を見たが、そのままおれるように体を預けてきた。ぼくは彼女の体を受け止め、両手でかかえた。思ったよりもずっと軽かった。生徒たちからはからかうような声が出たが、それに混じって、ほーという感心したような声が聞こえた。

振り付けの記憶はおぼつかなかったが、真剣に踊った。そうしなければ壬生に申し訳ないと思ったからだ。はずかしいなどという気持ちはどうにどこかへ消えていた。

ラストの疑似キスシーンでは、壬生の顔が間近にせまり、かなりどきっとした。壬生の顔をそんなに近くで見たことはもちろんない。やはり見物人からは本物のキスに見えるらしく、その瞬間は爆笑が起ったが、全然気にならなかった。どうせなら、もっと本物のキスに見えるようにやってやろうかと思っただけだ。

「はい、オーケー！」

沼田先生は大きな声で言った。

「壬生さんのオーロラ姫は完璧！ 一回で振り付けを覚えるなんて、すごいわ。フィリップ王子もまずまず。あとは振り付けをきちんと覚えること。オーロラ姫に個人レッスンを受けたらいいわ」

その瞬間、また全員が爆笑した。

「アツアツの二人！」

「個人レッスンで燃えるう！」

男子から、ぼくと壬生を冷やかすようなセリフがいくつも飛び、そこに女子の笑い声がかぶさった。壬生が唇をかむのが見えた。ぼくは ② **見物人** たちに向かって言った。

「お前らに言われなくても、壬生としっかり練習するよ。お前らこそ、後ろで下手くそな合唱するなよ」

男子たちはおどろいた顔でぼくを見た。(C) **ぼくがそんなことを言うとは思って** もいなかったのだ。陽介と健太も目を丸くしていた。

しかし誰よりもおどろいた顔をしていたのは壬生だった。

踊りの練習がおわった後は、合唱の練習だった。ぼくと壬生は合唱には入らないので、帰ってもいいということになった。陽介と健太を待っていいようかとも思ったが、つかれていたで、先に帰ることにした。

靴置き場でズックにはきかえていると、壬生に名前を呼ばれた。

③ 「さつきはありがとう」

壬生はぶつきらぼうに言った。

④ ぼくは「何のこと？」ととぼけた。壬生は何か言おうとした感じだったが、何も言わずにくるりと背を向けた。今度はぼくがその背中に「壬生」と呼びかけた。

「何か用？」

「お前の踊り、上手かったな」

「そうでもない」

「いや、沼田先生もほめてたやないか」

「遠藤が下手すぎるんや」

「それはそうやけど、壬生が上手いことには変わりはないやん。沼田先生の踊りを見て一回で振り付けを覚えるなんて、すごいで」

「あいつらの前で、下手くそな踊りはしたくなかったから——」

(D) 負けずぎらいの壬生らしいなと思った。ぼくは笑われることばかり気にしていた。それでも一度見ただけで新しい振り付けを覚えるなんて、(E) できることではない。

「遠藤はもう覚えた？」

「いや、まだや。あんな **フクザツ** な踊り、一回で覚えられへん」

壬生は軽くうなずいた。

気が付けば、壬生と並んで歩いていた。この前の天羽西公園あもつでの会話は別にして、学校の外でこんな風に壬生としゃべるのははじめてだ。

「なあ、壬生」

「何？」

「いつもぼくらのことをからかうけど、ぼくらに何か恨みうらみでもあるんか？」

言いながら、壬生は特にぼくらだけをからかっているわけじゃないことに気が付いた。全方向的に他人に悪口を言うのだ。

「からかうのは恨みがあるからやと思てるの」

「そらそうやないか。恨みがあるから悪口を言うんやろ」

「ほんなら、あんたはわたしに『おとおんな』って何度も言うたけど、わたしに何か恨みがあったわけ？」

思わず言葉につまった。たしかに壬生には恨みもないのに何度もからかったことがある。

「わたしが遠藤になにかしたことある？」

「たぶん——壬生がぼくに何か言うたんやと思う」

「わたしがいつ何を言うたのよ」

「そんなんすぐに思い出せへんわ。そやけど、壬生はいつも人の悪口を言うてるやないか。しかもものすごいことを」

「わたしは自分が悪口を言われた相手にしか言わへんよ」

「そやけど、今日も水谷を泣かしてたやないか」

昼休みに壬生と水谷が廊下ろうかで口ゲンカをして、水谷が泣いていたのを見た。ケンカの原因は多分、水谷が壬生をオーロラ姫役に推薦すいせんしたことだ。

「王女役に推薦されたくらいで泣かすことはないやないか」

「文句を言うくらいええやんか。水谷が言い返してきたから、ケンカになっただけ」

そのとき、壬生が水谷に投げつけた言葉は、ぼくにも聞こえた。壬生はこう言ったのだ。

「ドチビの一寸法師。一年生の教室に行け」と。水谷は背が低く、六年生なのに三年生くらいの身長しかなかった。それで水谷は泣いた。

「あんな言い方はないと思うで」

「水谷がわたしに何を言うたのかは、なかったことになっているんやね」

「何を言うたんや？」

壬生は答えなかった。それを見て察しがついた。

「そうか——お母さんのことを言われたんやな」

壬生は一瞬すくんだように見えたが、すぐに*傲然と胸を張って言った。
「そう。お母さんのことを笑うやつには、どんなことでも言うてやる」
そうだったのだ。壬生がロゲンカの際、相手の肉体的特徴をのしるのはそういうときだった。そのときの壬生の言葉の激しさと言
つたらない。

そのとき、ぼくは壬生に一度も*父の悪口を言われたことがないのに気が付いた。彼女にはこれまでさんざんにこき下ろされてきたが、
中学生にのされた父の無様な顛末を笑われたことはない。その話は当然、壬生も知っていたはずだが、あれほど口の悪い壬生はそのこと
を一度たりとも口にしたことはない。その理由は、ぼくが壬生の母親のことをからかったことがなかったからだ。

壬生は、健太の*吃音も陽介の家の生活***ホゴ**も、からかったことがないことに気付いた。二人とも壬生の母親のことを笑ったことが
なかった。この発見はちよつとした衝撃だった。なんというか、壬生が悪口を言うルールのようなものを持っていることに感心した。
今ならそれを「矜持」という言葉で表現できる。壬生は十二歳にして誇りを持っていたのだ。同時に、やられたらやりかえすという徹底
した生き方をしていた。決して無神経で鈍感な子ではなかったのだ。

壬生は踊りの練習のときも逃げなかった。絶対に投げやりな態度は見せず、どれだけ笑われても真剣に取り組んだ。そして見事な踊り
を披露した。クラスの皆は笑っていたが、内心では感心していたはずだ。

ぼくは壬生紀子という人間を**ゴカイ**していたのかもしれないと思った。同時に壬生に親しみを覚えた。いや、その表現は正しくない。
⑤正直に言えば、壬生に敬意を持ちはじめていたのだ。

壬生と別れて一人になってからも、壬生のことがいつまでも心にあった。

壬生のすばらしい踊りが何度も脳裏によみがえった。壬生がぼくに体を預けてたおれてきたときのことを思い出した。そしてラスト近
くで壬生の顔がすぐそばにせまったときのことを思い出し、胸がどきどきした。

帰宅してから、沼田先生に教えてもらった振り付けを頭の中でさらいながら、部屋の中で一人で踊った。次の練習までに完璧に覚えて、
壬生をびつくりさせてやろうと思った。

(百田尚樹『夏の騎士』新潮社)

*注 沼田先生||「眠れる森の美女」の振り付けと合唱を指導する女性教師。 傲然||おごり高ぶるさま。

父の悪口||小学二年の時、祭で父は中学生とケンカになり、ひどく泣かれたことに対するからかいの言葉。

吃音||言葉につまること。

問一 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) (E) に入る言葉として適切なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言
葉を二度以上使ってはいけません。

ア まさか イ なかなか ウ いよいよ エ さんざん オ さすが カ もはや

問三 ——線部①とありますが、「ぼく」がこのような心の状態になった理由を説明しなさい。

問四 ——線部②とありますが、他の箇所では「皆」「生徒たち」「全員」と表現されているクラスの生徒たちが、ここでは「見物人たち」
となっていることについての説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「見物人たち」とすることで、ぼくと壬生が一生懸命に踊りの練習をしているのに、その真剣な思いを理解しようとせず、ただか
らかいおもしろがっているだけのクラスの生徒たちを非難するぼくの気持ちを読み取れる。

イ 「見物人たち」とすることで、ぼくと壬生が演技に集中するあまり、劇の中の主人公になりきってしまい、周囲で見ていたクラス
の生徒たちが単なる観客としてしか思えない、ぼくの冷ややかな気持ちが読み取れる。

ウ 「見物人たち」とすることで、ぼくと壬生が練習に集中しようとしているのに、クラスの生徒たちがからかうような発言をし、邪魔
しようとしてくることに対して、ぼくがわずらわしく感じていることが読み取れる。

エ 「見物人たち」とすることで、ぼくと壬生が真剣に練習をしている姿を見て、感心している者もいるようだが、結局クラスの誰も
味方まではしてくれないことに対して、ぼくがむなしさを感じていることが読み取れる。

オ 「見物人たち」とすることで、ぼくと壬生が演技とはいえ恋人同士のように演じている姿を見て、うらやましく思っているにもか
かわらず、からかうことしかできないクラスの生徒たちへのぼくの優越感が読み取れる。

問五 —— 線部③で「壬生」が「さつきはありがとう」と「ぶつきらぼうに言った」のはなぜですか、心情をふまえて説明しなさい。

問六 —— 線部④のように「ぼく」が「とぼけた」理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真剣に踊った壬生に感動して彼女への見方が変わったことで、いつもクラスの子にからかわれている彼女の悔しさに気づき、守ってあげたいと思っただけであり、礼を言われるまでもないから。

イ クラスの友だちからいじめられることになるかもしれない危険を冒してまで、勇気を出して壬生を助けてやったのに、誠意のない礼の言い方をしてきたので、意地悪をしてやりたかったから。

ウ クラスの中で冷やかされても何も言い返さなかったり、ぼくにに対して礼を言ってくる、いつもの壬生からは想像しにくい行動を見せられて、どう対応していいか分からなくなってしまったから。

エ 昨日助けてもらったことのお返しで、クラスの子たちに言い返してやっただけなのに、壬生の礼にことさらに反応することで、壬生に対して好意を持っていると勘違いされたくなかったから。

オ 一生懸命踊った自分たちを無責任に冷やかすクラスの子に対して、自分も悔しくて反論をただけだったのに、壬生がぎこちなく礼を言ってきたので、余計な気づかいをさせたくなかったから。

問七 —— 線部⑤とありますが、「壬生」のどういうところに対する「敬意」なのですか、説明しなさい。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。 (四 十 点)

「考える」というのは誰もが自然に行っているように思えますが、それが習慣化している人もいれば、考えることを避けがちな人もいます。

教養を身につけるには、ベースとして自分の頭で考えることが欠かせません。「思考習慣があまりないかもしれない」という人は、さまざまな事柄について「なぜだろう」と疑問を持つことを心がけることから始める必要があります。

自分に思考習慣があるかどうかを知るには、自分と異なる考えにぶつかったときのことを想像してみてください。

たとえば上司や同僚と意見が食い違ったとき、どんなふうに思うでしょうか？

「自分のほうが絶対に正しいのに！」と怒りやいらだちを感じ、「気分が悪いからジムで汗を流して帰ろう」などと対処するのは、考えることを放棄する態度だといえるでしょう。

このような場面では、感情でものごとを片づけず、「なぜ上司は自分と意見がちがっているのか？」ということ深くほり下げ、考えてみる必要があります。

こうした習慣は、日常のさまざまな場面で「意識的に考える」ことで身につけることができます。

たとえば「今日会った人はとても感じがよかったですね、なぜ自分は感じがよいと思ったのか」「今日のランチでは、なぜこの定食を選んだのか」といったように、自分の行動や心の動きなどについて「なぜだろう」と考えてみるだけでもいいのです。その積み重ねが、新たな情報に接したときに、どう頭を使うかの訓練になります。

一般にいわれる「教養」のイメージは、絵画のことも音楽のこともわかるといったような「幅広い知識」でしょう。

しかし教養のベースとなるのは、何らかの専門領域についてある程度深く学んで得た知識をもとに、その領域で物事を深く考える経験にあると思われまます。

たとえば大学で経済学を学べば、基本的な経済に関する知識が得られるだけでなく、経済学で使われるさまざまなモデルを使って思考する方法を身につけることができます。

このように何か一つの領域を学ぶことが、その知識や思考法をベースとして他の領域が「経済学的な考え方とどうちがうか」を考えることにつながります。

その意味では「教養人はまず専門人でなくてはならない」といえるでしょう。

とはいえ、教養を身につけるといふ観点では、大学院で研究者を目指すような高度な学びが求められるわけではありません。

大切なのは、自分の中に議論や思考の「軸」を持つことです。これは大学で学んだことでも、社会人として身につけた職務上の専門性でも構いません。自分はこんなふうを考える、こんなふう議論を整理してきたという、自分なりの思考の「軸」を確認することこそが、みなさんの教養の土台なのです。

「そんなことをいわれても、自分にはそんな『軸』と呼べるほどのしつかりとした考え方はない」と思う人も少なくないかもしれません。しかし、実はそう感じる人のほとんどが、学校での学びや社会人としての経験等を通じ、かなりしつかりとした教養の土台を身につけています。ただ、それを「軸」として自覚的に整理できていないだけです。

ですから、みなさんにとって最も重要なことは、この持っているはずの「軸」をしつかり整理できるようにすることです。それは言いかえると、教養の土台を耕すことです。

そして土台を耕すうえで有効なのは、先にふれたように「異なる考えや意見を持つ人と建設的に議論し、思考を発展させていくという行動原理を持つこと」なのです。

異なる考えを持つ人と議論をすることによって、自分の考えや軸が再確認できると同時に、思考を発展させていくことができるからです。

ただし、建設的に議論して思考を発展させるためには、単に話せばよいというわけではありません。

「建設的な議論」をするためには、ただお互いの考えを主張し合うのではなく、自分とは異なる考えに相互に耳をかたむけることから始めるのが大切です。

自分とまったく異なる意見にふれば、「なぜこんなに考え方がちがうのか」というショックを受けることもあります。しかし議論するには、自分が受けたショックについて言語化し、それを相手に伝えなければなりません。

また、相手が自分の考えに対していただいた違和感や受けたショックについて、相手の言葉を聞くことも必要です。

当然、このような議論では、ぶつかり合いが生まれます。しかし、そのようなぶつかり合いがなければ、自分の考え方にどのような偏りがあるのかに気づくのは難しいでしょう。

「同じものを見たとき、まったくちがう考え方をする他人」と議論することは、メタ認知（自分を客観視する力）を養うことにつながります。

自分の考えにとらわれることなく、思考を柔軟に発展させるために、このようなメタ認知がとても有効なのです。

「教養人」というと「本をたくさん読む人」といったイメージも強いように思いますが、本質的な教養において重要なのは、自分とは考え方が異なる人と建設的に議論できる力だということです。一人で本を読んばかりいても、なかなか教養は身につかないのです。

「議論でぶつかり合うことが必要」といっても、言い争いを推奨しているわけではないことに留意してください。「ぶつかり合い」という表現には、相手と競うこと、相手を打ち負かそうとすることはふくんでいません。

もし議論の際、あなたが相手に勝つことにこだわり、知識競争に走れば、それは教養とは真逆の態度となります。

議論をするうえで重要なのは、相手への * リスペクトです。

考え方のちがいは、主に「それぞれが大事にしているもの」が異なることから生じます。自分にとって大切ではないものでも、相手が大切にしているものであれば、その価値観に対するリスペクトなしに建設的な議論はできないのです。

(藤垣裕子+柳川範之『東大教授が考えるあたらしい教養』幻冬舎新書)

*注 リスペクト＝尊敬すること。

問一 筆者の考える真の「教養人」とはどのような人だと思いますか、百字程度でまとめなさい。

問二 あなたは、筆者の考える真の「教養人」として自分が何点だと思いますか。百点満点で点数をつけ、その採点理由を二百字以内で述べなさい。

国語 解答用紙 (その二)

—

問一

d	a
e	b
	c

問二

A
B
C
D
E

問三

--	--	--	--	--	--

問四

--

得 点

受験 番号	
----------	--

問五

--	--	--	--	--	--

問六

--

問七

--	--	--	--	--	--

国語 解答用紙 (その二)

二

問一

100

受験
番号

問一

点

200

100